

連載 16 小津安二郎の「野性」

先日まで東京より暑い名古屋に出張していた。江戸川乱歩（1894 - 1965）との交友、南方熊楠（1867 - 1941）との交友でも知られる岩田準一（1900 - 1945）関係の資料調査である。岩田準一は、在野の民俗学者、書誌学者にして竹久夢二に師事した画家といった多彩な顔を持つ粹人だったが、現在では特に男色関係の風俗研究者としても知られる。江戸川乱歩の問題作「孤島の鬼」のモデルに擬せられてもいる。来簡資料を眺めているうちに、いまさらながら岩田準一が宇治山田の人であり、そういえば、小津安二郎（1903 - 1963）と旧制中学が同窓なのだったと気づいた。三重県立第四中学校、現在の宇治山田高等学校である。岩田準一は早生まれなので学年は四年異なっているのだが、ほんのちょっとかすっている。

小津安二郎の方は、松阪の富裕な商家の出だった。平山周吉『小津安二郎』（新潮社、2023年）はこれを遡って、「松坂の小津家の一党から出て、宣長は姓をあらため、先祖の姓の本居を名乗る」と、国学者・本居宣長にまで言及している。そういえば、岩田準一は、親の意向で、神宮皇學館へ進学するも、馴染めずに、東京の文化学院に転じたというモダンボーイだった。小津安二郎も、学校嫌いであつたらしい。

平山『小津安二郎』は、小津が批評家好みの映画監督で、だから『キネマ旬報』のベストテン第一位を戦



『一人息子』（1936）スチール写真
左：葉山正雄、右：飯田蝶子

前三年連続で（『生まれてはみたけれど』『出来心』『浮草物語』）とっているとも指摘している。

『浮草物語』で一位をとった後、『キネマ旬報』では「日本映画監督研究・四：小津安二郎座談会」（1935年4月1日号）を開いている。集まった批評家は、筈見恒夫、滋野辰彦、岸松雄、友田純一郎、北川冬彦、飯田心美という錚々たる面々で、丁々発止、面白い。

筈見（恒夫） 谷崎（潤一郎・引用者注）さんの好きな人は、歌舞伎を見れば音羽屋（ここでは六代目尾上菊五郎・引用者注）が好きだし、又映画を見れば小津安二郎が好きだよ。

これに対して小津が「谷崎さんのものは昔から好き」と発言しているのは意外でもある。

飯田（心美） 何か笑ふ時に殊更意識して飯田蝶子に齒をむき出させたり、馬のやうな動物的な感じを抱かせたり、総て人間と云ふものを人間より生物に近く扱かつて居るやうな気が僕にはして来たので、非常にこはかつた。

小津（安二郎）（略）或は動物的にやらしたかも知れない。

北川（冬彦） 小津氏には野性への憧れがあるのぢやないですか。

小津 あるですね。僕は非常に野人だからね。



平山周吉『小津安二郎』（新潮社、2023年）

こんな応酬も、戦後の、あるいは現代の小津安二郎評価からはなかなか出てこない言説ではないだろうか。

この座談会の時期は、ちょうど日本映画のトーキー移行期であるにもかかわらず、小津のサイレント映画が続けてヒットした、小津がまだトーキーを撮っていないということが、論議の的となった。はたして小津は確信的にトーキー製作を避けているのだろうか？批評家たちもあれこれの言説を引き出したかったよう

である。

北川冬彦は尋ねた。

「トーキーを撮らないのは機械に対する不信からでも来て居るのですか？」

これに対して即座に小津は応えている。

「ライカをやつてる関係上その不信はフィルムにも持つてます」。ライカカメラは、当時流行のコンパクトな写真機だった。だがライカがどうであれ、フィルムに不信を持っていると断言する映画監督、小津安二郎。その野性はなまなかのものではない。